

書評

井田克征『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈—シュリーヴィディヤー派の日常供養—』

京都：昭和堂、2012年、x+315頁、9500円+税、ISBN978-4-812212158

永ノ尾信悟

井田克征氏の『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈—シュリーヴィディヤー派の日常供養—』は2部からなる。第1部は「Tantrarājatantraにおける日常供養」、第2部は「Tantrarājatantra 和訳(第1-5章)」である。タントララージャタントラ(以下タントララージャと言う)というタントラ文献を中心とした研究と翻訳からなる作品である。第1部は5つの章からなる。第1章「序論」の第1節「タントリズムとは」において、ヴェーダ文化の遺産を継ぎ、正統的ヒンドゥイズムとも共有する要素をもちながら、独自の伝統を南アジアの文化の中で形作ってきたタントリズムとは何であるかを考察する。1絶対的な力への志向性と、2ミクロコスモスとマクロコスモスの相同性という観念を基礎として、その力が遍満する場所である宇宙において、儀礼と瞑想を通じて解脱と享受を同時に志向する存在としての個人があるという考えがタントラ的な実践に常にあると結論する(11頁)。第2節「タントリズムの研究史」で簡潔に約200年の研究史を概観する。更に、1960年代から新たなテキストの出版と写本研究を基礎としてタントラ研究が展開していき、今日にいたる状況を、参考文献に言及しつつ適切に記述する。

タントララージャはヒンドゥータントリズムの中のシュリーヴィディヤー派に属する。第3節「シュリーヴィディヤー派の位置づけ」が、考察の対象の文献の位置づけを行う。配偶女神を力(シャクティ)としてシヴァ神とともに敬うシャイヴァ・シャークタ派はヒンドゥータントリズムの中の大きな流れである。その流れの中に、女神トリプラスンダリーを主神とするシュリーヴィディヤー派はある。考察の中心であるタントララージャは14ないし15世紀頃の文献であるが、この派には11世紀頃のNityāṣoḍaśikārṇavatantra「十六ニティヤー女神の海」(『女神の海』と略述)と12世紀頃の成立のYoginīhṛdaya「女修行者の心臓」という先行する2つの聖典がある。本研究において先行文献として言及される

これら二つの聖典を3.2において略述している。3.3「Tantrarāja の概略」においてタントララージャ全36章の内容が提示される。

シュリーヴィディヤー派の入門者が義務として毎日三度トリプラスンダリー女神に対して行うべき日常供養は準備儀礼、浄化儀礼、チャクラプージャーの3つの部分からなる。第1部の第2章が扱うアルグヤ儀礼は準備儀礼に、第3章のプラーナーヤーマは浄化儀礼に属し、第4章で中心的なチャクラプージャーを分析することになる(第4節)。タントラ学派として伝統的に継承している願望成就や呪術的な儀礼などをこの派の文献は内包するが、最初の聖典『女神の海』は、トリプラスンダリー女神の清浄な信仰を展開する中、外的な儀礼を「形象的な側面から規定」(26頁)しているという。第二の聖典ヨーギニーフリダヤは、最高原理への帰滅としての個人の解脱を中心的なテーマとして、さまざまな儀礼行為を、その解脱を達成する手段であるとして理論的、内面的に解釈していく。シュリーヴィディヤー派の聖典にはこの対極的な2つの立場があり、この2つの聖典を前提とするタントララージャの折衷的な立場を第5節は明らかにしている。

第2章アルグヤ儀礼の中心にあるアルグヤはヴェーダ儀礼のひとつである賓客接待儀礼において客に与えられる水であった。タントララージャ5.30-31は「水にローチャナー、樟脳、サフラン、伽羅、麝香を混ぜたアルグヤ水を、支えがついた黄金などでできた器のなかにいれるべし(30)。火、太陽、月という要素を念想すべし、(ヴィディヤーの第三の部分)を10回、ジャパすべし、(アルグヤ水)によって、ヨーギニー達を満足させるべし(31)」とのみ規定する。著者はこの簡略な規定を説明していく。アルグヤ水に入れるもの、器の材質、器の支え、アルグヤマンダラの説明のあと、火、太陽、月の念想のヨーガ的な意味、マントラなどを低く唱えるジャパの対象である六肢ヴィディヤーと、根本ヴィディヤーのsauḥがいかなるものであるか、そしてこのように準備されたアルグヤは女神の礼拝のほか、祭場や祭具の清めにも使われることを明らかにする。

先行するヨーギニーフリダヤとその関連文献においては六肢ヴィディヤーのジャパと火、太陽、月の念想が極めて複雑な方法で行われていたこと、最終的に「ナヴァートママントラにより、ナヴァヨーニチャクラの中央にアムリテーシー女神を念想し、ダートゥデーヴァター達を

満足させ、最後にアーナンダバイラヴァ神を満足させる」(60頁)一連の成就法の枠組みを備えていたのがアルグヤの儀礼であり、酒を用いた特別なアルグヤが使われていたことなどを詳細に説明していく(49-61頁)。第3章のプラーナーヤマ、第4章のチャクラプージャーの場合もそうであるが、タントラ儀礼の儀礼行為のひとつひとつが複雑なマントラや儀礼構造、空間構造を内包していて、著者は典拠文献と参考文献に依拠してひとつひとつを解説しつつ、解き明かしていく。

第3章のプラーナーヤマはヨーガの行法において良く知られている調息である。タントララージャ 27.67-68が方法を教えている。日常供養の文脈でタントララージャ 5.32-33aは短く言及する。「人体内部で火、太陽、月が存在する3つのチャクラに女神の3音節からなる根本ヴィディヤー *aiṃ klīṃ sauḥ* が赤く輝き、修行者の身体も赤く輝くことを瞑想し、調息をおこなう」という規定を、注釈に従い、一連の行為と解釈する。『女神の海』1.126は「上述の根本ヴィディヤーのひとつひとつをそなえた3つのチャクラを念想して、最初のヴィディヤーにより手の浄化を行う」と記述するが、ここに対する注釈に従い、「心にヴィディヤーを想起しつつ、三度のプラーナーヤマを行う」(69頁)と著者は考える。注釈の見解に従って、3つのチャクラにおける3音節の根本ヴィディヤーの念想を調息と結びつけた後に、3つのチャクラの念想が重要となるクンダリニーヨーガの議論を展開する。

『女神の海』は日常供養の調息の文脈とは異なる4.12cd-16abにおいてクンダリニーヨーガを規定する。一番下のチャクラにいるシャクティとしてのクンダリニーが覚醒して、一番上のチャクラに達して、「修行者は、最高の歓喜としての成就を獲得する」(74頁)という一般的な「二原理合一型のクンダリニーヨーガ」(80頁)である。第3章第4節「クンダリニーヨーガとしてのプラーナーヤマ」では、ヨーギニーフリダヤ3.172-173の、シュリーヴィディヤーという別のマントラの「発声のプロセスが、クンダリニーヨーガとして読みかえられて説明されている。つまり発声されるべき音ないし氣息が、クンダリニーヨーガとして理解されている」(78-79頁)と、発声される音を調息の息と置き換え、クンダリニーヨーガとしてのプラーナーヤマの議論をするが、書評者の理解では、これは調息との関係が曖昧な文脈の議論に思える。82頁の『ヨーギニーフリダヤ』3.198cd-199abの女神に対する酒によるバリの献供の

行為の中に、注釈に従って、調息の実践、この文献特有のクンダリーニーのヨーガ、そして個人原理と世界原理の合一を読み取る。この章は難解であった。クンダリーニーヨーガやシュリーヴィディヤーの説明など多くの有益な議論は行われているが、調息との関連を最後まで書評者は見出すことができなかった。

シュリーヴィディヤー派の中心的神格であるトリプラスンダリー女神の日常供養であるチャクラプージャーが第4章において詳細に議論される。5つの下向きの三角形と4つの上向きの三角形を組み合わせてできる43個の小さな三角形を円形の2重の蓮華の花弁と門を備えた3重の四角形が囲っているシュリーチャクラと呼ばれるヤントラが使われる。86頁にその図が示される(第1節)。シュリーチャクラは9層からなり各層がチャクラと呼ばれる。チャクラ毎に取り巻きの神格と呼ばれる複数の女神達が供養され、そのチャクラのそれぞれの主宰女神が供養されるという2種類の供養が組となって繰り返される構造を持っている。その枠組みは89-91頁に示される。チャクラプージャーの構造は同じなので94-103頁でそれぞれのチャクラで供養される女神達のマントラが、そして103-105頁で各チャクラの主宰女神のマントラとムドラーが示される(第2節)。

第3節では、先行する諸文献のチャクラプージャーや関連する儀礼要素を検討し、タントララージャのチャクラプージャーの形成を解明する。『女神の海』の分析から取り巻きの神格の供養が元来の形であったこと(109頁)、各チャクラの主宰女神の供養はヨーギニーフリダヤにおいて導入されたこと(109頁)が示される。第7のチャクラの8体の「言葉の女神」達、その内側に来る4種の武器、第8のチャクラの三女神と第9のチャクラのトリプラスンダリーは独立した成就法に用いられる、「9つの三角形からなるチャクラ」という固有のヤントラを構成しており、これがチャクラプージャーの核を形成していたとする。

第2節の大半は多くの女神の供養に用いられるマントラとムドラーの紹介に費やされている。第1のチャクラの10体のシッディ女神のマントラが94-95頁に掲載されているが、それらはタントララージャ4.66-67に規定されている。読者は第2部の和訳を読むと簡単にその場所を見つけることができるが、それぞれのマントラの紹介のところでもタントララージャの箇所を示していたらより親切であったろう。106頁に挙げら

れている4つの武器のマントラの典拠を書評者は見つけることができなかった。

複雑な歴史をもつタントリズムの中にシュリーヴィディヤー派という流派と、考察の中心となるタントララージャタントラを位置づけ、さらに複雑な構造を示すタントラの儀礼を記述、分析し、それぞれの要素の形成過程と宗教的意味を解明していった、極めて優れた労作である。読者は第一部を読むことにより、タントリズムとは何か、タントラ儀礼とは何か、そして現在の研究状況はいかなるものかを十分知ることができる有益な著作である。以下に気が付いた細かい点について論じてみる。

113-116頁で武器を āyuddha と繰り返し表記する。正しくは āyudha である。36頁n. 14の内容は PadmaP V.80.57cd-58ab であり、ヴィシュヌの身体の塗香の材料を示す。36頁n. 19は Kane IV, 420頁で、シュラッタに用いられる容器が説明されている。著者の文脈と異なるので、それぞれの文脈を明示してほしい。51頁の図3で5) 四辺、6) 中央は、5) 中央、6) 四辺になるのでは。53頁下から2行目 dhūmrāpādukām は dhūmrārcispādukām ? 55頁7行目 Dha は Da ? 57頁6行目「液体の供物 (vighṛta)」を232頁n. 58で「したたり落ちた供物において (vighṛte drave)」とする。Drava は「液体」では？ 74頁3行目で「アクラクンダリニー」が突然登場し、次ページまでの議論に使われる。この典拠は？ 93頁下から9行目 (TR 4.66-49ab) は (TR 4.66-69ab) では？ 96頁下から6行目 aiṃ klīṃ tripurānityāpādukām pūjayāmi で klīṃ と tripurā の間に sauḥ がはいるのでは？ TR4.95cd-96ab からは tripurā の後の nityā の挿入が理解できない。101頁最後の行 kām eśvarī は kāmēśvarī に？ 107頁で NSA 1.183-185ab が訳されている。その4行下で「NSAのこの個所に対する Jayaratha の注釈は」として、その2行下で (Vivaraṇa p. 73 ad NSA 1.163-165ab) とある。183-185ab では？ 108頁表13の第八「愛欲の沈静 (kāmaśāyitva)」の kāmaśāyitva はヨーガの8つの神通力の列挙の際には yatrakāmaśāyitva と表記され「望む場所に移動できる能力」とされる。Monier-Williams, Sanskrit-English Dictionary, s.v. yatrakāmaśāyitva を見られよ。この文脈で「愛欲の沈静」とした根拠がほしい。115頁下から6行目 (pī□ha)。□が残ったままになっている。

134頁図6 ラーシチャクラで Vṛṣa の枠の中で ṛ の長音がない。Kanyā

の枠の中で最後のaは ña、Dhanu の枠の中で ana, apa, aha は na, pa, ha ? その頁の下から5行目 (dehak□aya)。143頁 [87] で87cdの訳がないのでは? 146頁 [6] の訳の提案「このように彼ら九人によってこの世に力が広まったタントラをカーディシャクティである他ならないあなたがクリタユガにおいて整えた」。150頁 [23] の2行目「満月 (pūrṇā)」は143頁 [91-92] の2行目で「プールナーの日」と訳して、253頁 n. 76 で適切な説明をしている! 163頁 [9] の1行目 (auṁ) は (aiṁ)。218頁下から4行目 (□a, kṣa)。225頁 n. 64 で MA KP, RauA KP の MA, RauA の説明はあるが KP のがない。Kriyāpāda? 229頁 n. 35 の Gonda は Gupta? 231頁 n. 52 の末尾「見出されるものと同じである」とは言えないのでは? 233頁15行目の VBh の情報がない。236頁の2行目 GZ 33-4 は 33-37cd? 248頁 n. 24 の Türostig [2002] は [1985]。249頁5行目の Malaviya と、同じ頁の n. 28, 29 の Chaudri [1940], Chaudri [1948] の情報がない。251頁 n. 49 の KC の情報がない。254頁 n. 9 で pādukāṁ pūjayāmi を「～の足を、私は供養する」とする。pādukā は、2次的に「尊敬すべき人の足」になるかもしれないが、1次的には「くつ」を意味する! 256頁最後の行の Saṁmukha は ṣaṁmukha? 260頁 n. 63 の「島 [2004]」の情報がない。275頁 n. 73 の mūlādhāra は mūlādhāra。

えいのお しんご ●東京大学名誉教授